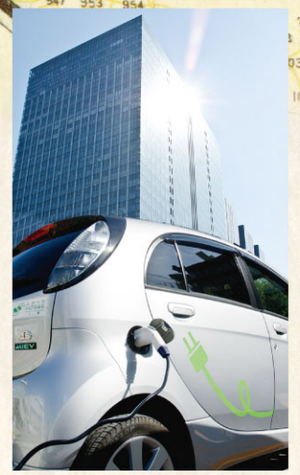
※大正11年当時の地図
（注・明電「社」との表示あり）

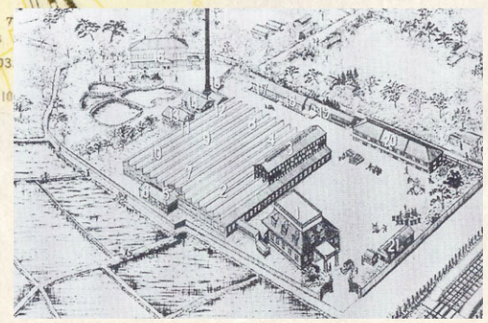
ものづくりの街、ふるさと大崎の心をつなぐ学舎（まなびや）、芳水小学校

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNA（原風景）を訪ねる『大崎今昔物語』。その第八話は、大崎がものづくりの街に向け発展途上にあった大正時代、小学校が不足して不便だった現状を見かねた明電舎初代社長・重宗芳水氏とたけ子夫人が私財を投じて寄贈した「芳水小学校」の話。両氏の志を記して「芳水」の名を戴いたその小学校は、その後、全国でも珍しい人名のついた学舎（まなびや）として、地元、ものづくりの街大崎のシンボルとして存在し続けていきます。

小学校建学の祖は、明電舎初代社長重宗芳水氏。つねに街の発展と共にあった、ものづくり企業と小学校。



明電舎本社のあるThinkPark Towerを望むEVカーシェアステーション。排気ガスを出さないクリーンな環境と災害に強い街づくりを目指した先進のコミュニティ「スマートシェア倶楽部」のプレミア（運営）会員として、明電舎はEVカーシェアリング事業を積極的に推進。つねに地元大崎の将来を見据えた活動を展開しています。



（上）発電機の製造工場として、中央区明日町から大崎へ移転した頃の明電舎。工場の敷地内には、天然の氷を作るための溜め池の跡も残されています。

現在の区立芳水小学校

（上）大正時代、創設されて間もない頃の「荏原郡大崎町芳水尋常小学校」教師陣。当時の先生の数は10名ほど、生徒数は9学級570人と記録されています。
（右）水田や竹藪を開いて建てた芳水小学校の校舎（開校した頃）

大正7年、学校不足の大崎へ私財を投じて創設した「芳水尋常小学校」。

大正初期の頃、工業化へ向けて歩み始めた「大崎町」では、工場の進出と共に急速に都市化が進み、工場勤労者世帯の子供達が通う小学校が著しく不足する状況にありました。当時の大崎町には、第一、第二の2校の日野小学校しかなく、急増した生徒で一日に2～3回も入れ替え授業を行い、結果的に夜になって生徒が帰宅することも珍しくない状態でした。しかもその通学路の多くが田んぼ道で、雨が降るとぬかるみになり、長靴をとられたり転んだりと、生徒にとってはひどく不便な通学環境となっていました。

そんな状況下にあった大正2年、大崎に移転してきた（株）明電舎では、増加する従業員の子供の入学で地元の負担増となることに心を痛めた初代社長重宗芳水氏が、なんとか小学校を設けて地元に手助けできないかと案じ、その思いを継いだたけ子夫人が小学校の寄贈を申し出たのでした。これを受け大正7年に晴れて「芳水尋常小学校」が創設、学校不足の解決と大崎の教育環境整備に大きな貢献を果たしたのでした。

重宗 たけ子 氏

重宗 芳水 氏

地元大崎の発展を支え続ける明電舎

その後の昭和27年、芳水小学校は老朽化した煙突から出火、校舎の大半が焼失する事態にみまわれます。このときも、当時の明電舎社長重宗雄三氏が校舎の再建に尽力、新しい講堂を寄贈しています。

その際、再建を記念して創られたのが「よい子の像」（写真）。そこには「ここに学ぶすべての子供が美しく愛らしく生い立つことを念じて」と記され、芳水小学校に学んだすべての子が誇りと感謝の気持ちを持って育つことが祈念されています。では、こうした支援を続けてきた（株）明電舎とは、いったいどんな企業なのでしょうか。

創業は明治30年、発電機の製造工場として大崎に移転後もすでに1世紀以上という長い歴史を持つ明電舎は、大崎を代表するものづくり企業として知られてきました。現在では再開発で創出したThink Park Towerに本社を構え、隣地にある明電舎総合研究所と共に最先端の技術を活かしたリーディングカンパニーとして活躍しています。こんにちではまた、地元大崎でのEVカーシェアリングの運営など、地域の環境・エネルギー問題解決へ力を注ぐ明電舎。そこにはかつての重宗芳水氏の建学の志と同様、つねに地域と一体となって発展へと歩む企業の姿勢が見うけられます。そして、ふるさと大崎の学舎に付された「芳水」の名。それは将来この街の創造的発展を担う子供達に向けたエールとも言えそうです。

■参考資料：区立芳水小学校90周年記念誌／「新鮮大崎」写真・編集資料 他